
キノ魂 The Gintama World

ムーンアロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キノ魂 The Gintama World

【Nコード】

N1833I

【作者名】

ムーンアロー

【あらすじ】

自分が住む国を探して旅をする少女、キノとそのモトラド、エルメス。二人（？）の旅が遂に終わるときが来た。キノがたどり着いた国…それは『侍の国』だった。

プロローグ 旅の終わりは新たな始まりのとき（前書き）

こんにちは。もしくは初めまして。ムーンアローです。

別の小説と平行して書いているので、更新が遅れるか忘れる場合があります。しかし、なるべく頑張って書いていきたいと思うので、よろしく願います。

今回はプロローグなので、基本短いです。どうぞ。

プロローグ 旅の終わりは新たな始まりのとき

森の中の一本道を、一台のモトラド（注、二輪車。空を飛ばない物だけを指す）に乗った少女が走っていた。

少女の体躯は細く、茶色のコートを着ている。頭にはゴーグルと小さな鍔付きの帽子をかぶり、風圧で飛ばないように耳を覆う垂れを顎の下で結んでいた。モトラドの後部には旅に必要な道具が搭載され、少女の腰には左右一丁ずつパースエイダー（銃器。この場合は拳銃。）のホルスターがぶら下がっている。

「ねえキノ。なんか天気が怪しくなってきたよ？」

モトラドが運転手の少女に向かって言う。

「そうだね。どこか雨宿り出来る所を探さないと……」

キノと呼ばれた少女も同様に、モトラドに向けて返事をする。

空は厚く鈍い色の黒雲に覆われ、風も強くなってきた。今にも嵐が来そうな気候である。

「でもキノ、ここ数時間走ってたけど、この辺りに人の住んでそうな気配はまるで無かったよ？」

「そうネガティブに考えるなよ、エルメス。もしかしたら、そろそろ民家が見つかるかも知れないだろ？それに、ここで考えても仕方が無いよ。少なくとも、この辺りじゃ雨宿りは出来そうに無い。」

キノがそう言うと、エルメスと呼ばれたモトラドはため息をつく。

「ま、いいけどね。」

その一言で会話は終了し、モトラドはなおも走り続ける。雨宿りできそうな場所を探して。

「？キノ。あれって…」

エルメスが前方数百メートル先に何か柱のような物を見つける。

「…竜巻…みたいだね。」

エルメスが発見したのは、かなり大きな竜巻だった。しかもそれは、かなりのスピードでキノ目掛けて周りの木を巻き込みながら向かってきている。

この曇天が齎した物。それは大雨でも嵐でもなく、巨大な竜巻だったのだ。

「ヤバイ！逃げよう、キノ！」

「うん。それが得策みたいだね。」

キノはエルメスを急いで反転させると、竜巻から逃げるためにアクセルを全開にして加速する。だが竜巻のスピードはどんどん上がっていき、じわじわとキノとの距離を縮めてきている。

「ダメだ、これ以上スピードが出せない！追いつかれる！」

「くそっ、万事休す…か。」

冷静沈着なキノが珍しく諦め始め、その三十秒後にはエルメスが持ち上がり始めた。

「うわあああああ！！キノオオオオオオオ！」

「…ここまでか…」

完全に竜巻に飲み込まれ、上空数百メートルに打ち上げられるキノとエルメス。幾ら百戦錬磨のキノであっても、大自然の驚異には勝つことは出来なかったのだ。その竜巻が過ぎ去った頃、森の木々は吹き飛ばされ、キノとエルメスは言葉通り『この世から姿を消して』いた。

プロローグ 旅の終わりは新たな始まりのとき（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想等、お待ちしております。

では。

第一訓 河童装備は強いのか弱いのかよく分からない

歌舞伎町の外れにあるとある池。その中央には苔だらけのオブジエのような物が突き刺さっている。

そんな殆ど人の来ないような池で釣りをしている男が居た。その男は死んだ魚のような眼をしており、着物を着崩している。腰には『洞爺湖』と書かれた木刀を差し、銀髪天然パーマという髪形をしている。

男の持つ竹製の竿の先端がピクンと動き、男はそれに合わせて竿を一気に持ち上げる。すると糸の先にはなんとグロテスクな魚が食いついていた。

「おいおい、こないだはマトモな魚が釣れたのによお。今日はこんなばつかじゃねえか。」

「うるせえな。文句があんなら、別で釣りやがれ！」

文句を垂れる男 坂田銀時に言い返す人物が居た。ただし、池の中に。

彼の名は海老名。渦巻き眼鏡を掛け、河童の様な格好をした天人あまんとだ。何十年も前から、この池に住みついている。

「お前が寂しいだろうと思って来てやってんのに、何だよその言い草は。」

「馬鹿言え！誰がいつ寂しいなんて言った！」

海老名は池を飛び出して来て、銀時との口喧嘩が始まった。

そのとき、池の上空に一人の少女と一台のモトラドが現れたことに、二人は気が付かなかった。

「あー、もういい！俺ア帰る！」

「おお帰れ帰れ！二度とくんな！」

そう言ってお互いに背を向ける二人。海老名が池の中に向かって歩き出そうとしたとき、事件は起こった。

「ぶべらッ！？」

海老名の頭の皿に少女とモトラドが直撃し、皿が豪快に碎け散ってひっくり返った。

「！？お、おい！大丈夫か！？」

倒れてドザエモンになりかけている海老名に近寄る銀時。

「？こいつは…？？」

海老名の近くに浮かんでいる少女と、突き刺さっているモトラドを見する銀時。

これが、キノとエルメスが坂田銀時と出会った瞬間である。

こころは『からくり堂』。江戸一番の発明家と謳われる、平賀源外

が経営する店だ。その名の通り、機械を直す仕事をしている。
そこに銀時が少女　キノを連れて駆け込んだ。

「じーさん！空から女の子が！」

「ああ？何ラピユタみてえな事を言っただけやがる。」

実に分かりやすい台詞で突っ込む老人だ。

「うーん、コイツは見たことの無え型だな。」

モトラド　エルメスを診ているオレンジのレンズのゴーグルを
かけた老人。彼こそが平賀源外その人だ。

「ジイさんにも、見たことねえ機械つてあるんだな。」

「見たことねえのは確かだが…銀の字、コイツは妙だぞ。」

銀時は源外の台詞にピクツと反応する。

「あ？どういふ事だよ？」

「いやな、構造が古すぎるんだ。強いて言やあ、俺の修業時代並み
のスペックだ。」

そう言つと源外は後ろを振り返り、眠っている少女を見る。

「お前の連れてきた…空から降ってきたって言うバイクにしてもこ
の嬢ちゃんにしても…一体何者なんだ？」

「さアな。俺にも訳が分かんねーよ。」

小指で鼻をほじりながら答える銀時。指に付いたハナクソを親指を使って弾き飛ばした。

「う、うん…」

そうこうしているうちに、少女が目を覚ました。目頭を右手で擦るが、まだ少しポーツとしているようだ。

「よう、気が付いたみてーだな。」

「…?」

少女は辺りを見渡すと、ここが本来自分が居るはずの無い場所であることを、直感で理解した。

「あれ？確か僕は…竜巻に巻き込まれて…?」

「何イ？竜巻?」

「なるほど、だから空から降ってきたのか。」

少女の一言で納得する銀時だったが、源外は納得しなかった。

「妙だな。最近竜巻が現れたなんてニュースは無えし、第一そんなデケエ竜巻なら直ぐに分かんたる。」

「おお、そう言やそうだな。」

じゃあ何で…?と考える銀時に少女が問いかける。

「あの…ここは何処なんですか?」

「ん?ここは歌舞伎町だ。」

「カブキ…チヨウ？」

聞いたことの無い名前に、少女は首を傾げる。見たところ、かなり文明は発達しているらしい。そんな国なら噂にくらいなってもいい筈だ。

などと考えていると、自分の旅の相棒を思い出した。

「あの…僕のモトラド、どこですか？」

「モトラド？何だそりゃあ？」

「え…知らないんですか？二輪車です。これくらいの。」

キノは両手を広げて説明する。

「ああ、お前さんのバイクのことか。それならホレ、そこだ。」

源外の指差した方向には、調べるついでにメンテナンスしておいたモトラドがあった。

「ありがとうございます。起きてよエルメス。」

「ん…んん？キノ？僕たち、助かったの？」

「うおっ！喋った!？」

キノと呼ばれた少女がエルメスと呼ばれたモトラドを起こすと、いきなり喋ったため銀時は驚いた。

「ああ、すいません。僕はキノと言います。こっちはエルメス。」

「お…おお。俺は坂田銀時だ。銀さんって呼んでくれ。」

「俺は平賀源外だ。よろしくな、譲ちゃん。」

お互いに自己紹介を済ませ、銀時はキノに、キノは銀時に事情を

聞く。キノは世界を見て回るため、自分の住む国を探すために旅をしていたこと。旅の途中で竜巻に飲み込まれたこと。銀時は釣りをしていたら、突然キノとエルメスが池に落ちてきたことを話した。

「世界を見て回る旅ねえ。何だ？つまりはニートですか、コノヤロ
ー。」

「テメエも似たようなモンだろうが。このプー太郎。」
「うるせーよ、ジジイ。」

話の途中で口喧嘩を始める銀時と源外。キノはそれが終わるまで眺めている。

「で、お前これからどうすんだ？」

「はい。どこか宿を探して泊まるうかと。」

「そうか。つーかキノ。お前金あんのか？」

「ええ。一応ありますけど…。」

そう言うとキノは懐からどこかの国のお札を取り出す。それなりに枚数があり、お金には困っていないようだった。

「…なんだこの金？」

「…え？」

「うーん、この金じゃあ泊まれねえな。」

キノの持つお金を見て駄目出しする二人。どうやら江戸ではキノの持つお札や貨幣は使えないようだ。

「そんな…」

「どうすんの？キノ。」

一瞬にして無一文になってしまったキノ。困り果てているキノに、銀時がある提案をする。

「なんならキノ。ウチに来るか？」

「銀時さんの？」

歌舞伎町の住宅地にある場末のスナック『お登勢』。その二階に、銀時の経営する『万事屋銀ちゃん』がある。

主な仕事は依頼を受けて、猫探しや探偵など…早い話が何でも屋さんである。

その万事屋では今、銀時の連れてきたキノについての話し合いが行われている真っ最中だ。

「つまり、持っているお金が無くて宿に泊まれないから、ウチに泊めてあげるって事ですか？」

「ああ、そういう事だ。」

銀時の言いたいことを要約して復唱するのは、万事屋の雑用兼メガネ兼ツッコミ役の志村新八だ。

「珍しいアルな、銀ちゃんがそんなコト言い出すなんて。」

そう言うのはチャイナ服と頭のお団子が特徴の少女、神楽だ。確かに基本めんどくさがり屋で厄介事嫌いの銀時が、客を泊めてやるなんてそうそう無い事だ。

「しよーがねーだろ。目の前に落ちてきて、知らん顔するわけにもいかねーしよオ。」

頭をボリボリと掻きながら言う銀時。

その様子を見ていたキノは、正直気まずくなっていた。もしかしたら、自分がここに居ると迷惑なんじゃないか、とも考える。

「あの、銀さん。もし僕がお邪魔なら、直ぐに出ていきますけど…」
「ああ、気にしないで。銀さんいつもこうだから。それに、僕達はキノ君のこと、別に邪魔だなんて思っただけだよ？」

気を使って早々に立ち去ろうとするキノに新八が言う。確かに、銀時が素直じゃないのはいつものことだ。

「そうアル。それに、最近は『クリスマスオーダー』とかいうのが流行ってるネ！だから、全然無問題アル！」

「いや、神楽ちゃん、別にそういう事じゃないんだけど…。それと『クロスオーバー』ね。」

神楽の間違いにツッコむ新八。それを見ていたキノは、知識や単語を間違えて覚えている相棒を連想した。その相棒は今、下の『お登勢』に止めてある。

「まあとにかく、キノ君が心配する事ないよ。自分の家だと思ってゆっくりしてって。」

新八がキノに微笑みかける。それを見たキノも口元に軽く笑みを浮かべて、お言葉に甘える事にした。

こうして、キノの万事屋での生活が始まった。

第一訓 河童装備は強いのか弱いのかよく分からない(後書き)

感想等、お待ちしております。

では。

第二訓 習ひより慣れらるるって言ひけど教えてもらわなまぢゃ分からないうとまぢゃ

頑張って書いていきたいと思ひます。

じいじ。

第二訓 習うより慣れろって言うけど教えてもらわなきゃ分からないことも多い

キノの朝は早い。どれくらいかと言うと、朝日が昇ると同時に始まる。下手をすると鶏の鳴き声よりも早く起きる。

キノは隣の布団で銀時が寝ているのを確認すると、昨夜神楽に借りた寝間着を脱ぎ、ワイシャツに長ズボンに着替える。コートと一緒にハンガーに掛けてある、リボルバータイプとオートマチックのパスエイダーのホルスターを持って静かに寝室を出る。

「…!？」

キノの目の前に、何か白くてモフモフした巨大なモノが飛び込んできた。一瞬驚いたが、すぐにそれが何なのかを理解した。

「…なんだ定春か。」

神楽のペットの定春だった。定春は大きな花提灯を作って眠っている。

キノは定春を起こさないように忍び足でゆっくりと玄関に向かい、表に出た。

階段を降り、この時間帯は殆ど人の居ない住宅街を散歩がてら歩き、どこか広くて迷惑になりにくい場所を探す。因みにエルメスは『お登勢』の中なので、置いていくことにした。

数分歩くと、それなりに広い公園を見つけた。

「ここなら良いかな。」

そう言うとキノは公園を軽くランニングして体を温める。そしてリボルバータイプのパースエイダー『カノン』と、オートマチックの『森の人』の訓練を始めた。

ホルスターから素早く抜いて撃つ練習を繰り返していると、向こうから黒い長髪に着物の男性が近づいてきた。

「おや、珍しいな。こんな時間に人が居るとは。」

キノは一旦練習を中断してパースエイダーを下ろすと、男性を見る。

「おはようございます。」

「おはよう。しかし君、筋が良いな。」

男性はキノのパースエイダーの腕前に感心する。

「あなたは？」

「ああ、失礼。俺は桂小太郎と言ってな。まア革命家をやっている。」

「革命家…ですか。」

キノは革命家という単語に反応する。

「そうだ。ところで君、俺と一緒に日本の夜明けを見てみないか？」

そう桂は言う。つまり、仲間にならないかと勧誘しているのだ。

キノは少し考えてから答えを出す。

「折角ですが、お断りします。」

「そうか…。」

桂はやや残念そうにしている。と、そこに何かサイレンが聞こえてきた。

「拙い、もう追っ手が来たか。では少年、また会おう！」

そう言つと桂は、サイレンと逆の方向に物凄い勢いで走っていった。

「桂さん…か。」

また会えるかもしれないな、と思いながらキノは万事屋に帰っていく。

キノが万事屋に帰ってきたとき、銀時と神楽はまだ寝ていた。行くときと同じようにゆっくりと戸を閉め、シャワーを浴びて汗を流す。

シャワーを浴び終えて体を拭き、風呂場から出てきたキノは銀時

の様子を見る。

「…まだ寝てる…」

もう太陽はそれなりに昇ってきて、表では会社に向かうサラリーマンや通学中の学生が歩いていると言いつのに、だ。

「起こすのも悪いな。もう少し寝かせてあげよう。」

寢室の戸を閉め、銀時の机の隣にあるテレビの電源を入れる。

『おっは〜!』

テレビには眼鏡を掛けてモジャツとした髪型の妙齡の男性とキノと同年ぐらいの少女。それにカラフルな鎧を着てスケッチブックを持ち、顔中に白と黒のメイクを施した男性が映っていた。

キノはパースエイダーの手入れをしながら、出来るだけ音を小さくしてその番組を見ていた。

『続きまして、こんな侍はイヤだ〜。』

メイクをした男性が、手に持ったスケッチブックを広げてイラストを交えながら、面白おかしい事を話している。

「…」

キノはそれをチラチラと見ながら、手入れを進める。

『今日も元気に、行ってらっしゃ〜い!』

テレビを点けておよそ三十分。どうやら番組が終わったらしい。それとほぼ同時に、押入れの襖が開いて上の段から神楽が起きてきた。

「…ん？アレ、キノ。もう起きてたアルか？」

「おはよう、神楽。」

神楽が寝惚け眼でキノを見る。それにキノは素の顔で答えた。

しばらくすると新八がやって来て、銀時をたたき起こしてから朝ごはんの用意を始める。キノも手伝った。新八は最初は遠慮したが、「泊めて貰ってる身ですから、これくらいは」と言って食器を並べたりした。

『いただきます。』

今日の朝ごはんは、白米に目玉焼きだった。そんなに量は多くなかった。おかわりもさせてもらった。

「ご飯を食べ終わると、銀時がある提案をした。

「俺はこれから仕事があるからよオ、新八と神楽で江戸を案内してやってくれ。」

「分かりました。それで良いかな、キノ君？」

「はい。よろしくお願いします。」

今日の予定も決まり、キノはエルメスを引つ張り出すと新八と神楽に連れられて江戸の観光に向かった。

「で、何処に連れてってくれるのさ？」

エルメスが新八に訊ねる。

「うん、じゃあまずはターミナルに行こうか。」

「ターミナル？」

「うん。簡単に言えば、江戸と宇宙を繋ぐ玄関ってところかな。」

「新八のグダグダな説明じゃ、分かる物も分からないアル。」

新八の説明に、神楽がケチをつける。

「何だよそれ…とにかく行けば分かるよ。」

「うひゃ〜、凄い高さだね。」

エルメスがターミナルの大きさに驚きの声を上げる。

「うん。前に恐ろしく高い塔は見たことがあったけど、この塔は太くて安定してて、倒れることはなさそうだ。」

キノは以前訪れた『塔の国』を思い出していた。その国では、国領の中央にそびえる雲の位置よりも高い塔を作り続けることに力を注いでいた。それはもう何百年も前から建設されていて、最早何のために建てているのかさえも分からなくなっていた。

しかしキノが滞在して三日目の事、自身の巨大さに耐えられなくなった塔は、遂に倒壊してしまった。だが人々は落胆することも絶望することも無く、逆に大喜びしたのだ。

キノはその国のことを新八と神楽に話した。

「それで、その後はどうなったアルか？」

「うん。また新しく塔を建てるんだ、って張り切ってたよ。」

「へえ、へこたれない人たちなんだね。」

新八は思った。その人たちはきつと、僕が結婚して子供や孫が出来ても、孫の孫が出来ても、その間も永遠に塔を建てていくんだろ
うか、と。

次にキノたちが訪れたのは、キノが朝見つけたものとは違う大きな公園だった。その公園の中心には、仁王立ちになって前を指差し

ている着物を着た中年男性の銅像があった。

「新八さん、あれは誰です？」

銅像のモデルになっている人物について、キノが訊ねる。

「ああ、あれは江戸幕府の初代將軍、徳川家康だよ。」

「つまり、この国を造った人ってこと？」

と、エルメスが言う。

「まあ、そうなるね。」

そんな会話をしながら歩いていると、新八がある知り合いの男を見つけた。

「よう、奇遇だな。」

「あ、長谷川さん。こんにちは。」

その男はの名は、マダオこと長谷川泰三。かつては幕府の重鎮だったが、一時のテンションによる行動で幕府に切腹を命じられた。だが長谷川は逃走し、今では妻にも逃げられてフリーターとなりあらゆる仕事を転々としている。

「ん？そっちの子は？」

「はじめまして。キノといいます。こっちはエルメス。」

「よろしくー。」

キノとエルメスが長谷川に挨拶する。

「ようマダオ。こんな所で何してるネ。また仕事クビになったアルか？」

「う……。お譲ちゃん、ストレートに言うね……。まあその通りなんだけど……。」

神楽の刀よりも鋭い一言により、長谷川の気持ちは沈み込む。

「神楽、マダオって？」

聞きなれない単語に、キノの頭に疑問符が浮かぶ。

「『まるでダメなオッサン』。略して『マダオ』アル。」

「ああ、なるほど。その方が呼びやすいもんね。」

エルメスは物凄く納得したようだ。だが長谷川は逆に物凄く落ち込んでいる。

そんな長谷川を尻目に、一行はその公園を後にした。

観光名所を一通り観て、帰路に着くキノたち。そこでキノは新八に疑問をぶつける。

「新八さん。なんだかさつきから、どうも人に見えないような人たち^{あまんと}が居るんですけど……。」

「ああ、天人^{あまんと}って言ってね、簡単に言えば別の星の人達だよ。」

新八の話によると、かつて江戸に宇宙船が押しかけてきて江戸城に大砲を撃ち込んだことが始まりで開国し、天人が大挙してきた。それからというものの、幕府は天人に対して弱腰になり、天人による傀儡政権と化してしまった。そして、天人が我がもの顔で江戸の町を闊歩するようになった、ということらしい。

「成る程……。何処の国も大変なのは変わらないんだね。」

「そうか、だから桂さんは革命家をやっているんだ。」

キノは桂が天人を排除しようと頑張っているんだろうと考えた。

新八はキノの何気ない一言に反応した。

「え？桂さんに会ったの？」

「はい。朝、散歩に行ったときに勧誘されました。断りましたけど。」

ああ、そう。と、新八は安堵の表情を浮かべた。

「ただいま戻りましたー。」「ただいまヨー。」「ただいま。」

三人が万事屋に帰ってくると、仕事を終えた銀時が既に帰ってきていた。

「お、帰ってきたか。キノ、ちょっと話がある。」

「なんですか？銀さん。」

銀時が手招きでキノを呼ぶ。

「お前、あのバイク…モトラドだけ？免許持ってるのか？」
「免許…ですか？」

何を隠そう、キノは免許を持っていない。エルメスは『先代』のキノから譲り受けてからずっと乗っていたし、一つの国に三日間しか滞在しなかったために免許を取る暇が無かったのだ。なにより、いままで無くて困ったことが無かった。

「無い…ですね。」

「やっぱな。よし、俺と一緒に免許取りに行くぞ。」

それを聞いて、新八が驚く。

「え？銀さん免許持ってたよな？」

「おお、仕事終わって帰る途中にストーカー女轢いちまってよオ。おかげで免許取り消した。」

ストーカー女とは、恐らくさっちゃんこと猿飛あやめの事だろう。

「分かりました。僕も一緒に行きます。」

「よし、決まりだな。」

こうして、キノは銀時と一緒に免許を取りに行くのであった。

第二訓 習ひより慣れらるって言ひけど教えてもらわなまぢゃ分からないうとまぢゃ

感想等、お待ちしております。

では。

第三訓 かもしれない運転で行け（前書き）

キノが免許を取りに行く話です。ほぼアニメ版を使っていますが、キノ視点メインなので勘弁してください。

どうぞ。

第三訓 かもしれない運転で行け

大江戸自動車教習所。江戸の教習所でも大きな部類に入る自動車の教習所だ。そこに銀時とキノは、免許を取りに来ていた。

「すいませーん。また来ちゃいましたー。」

「『また来ちゃいましたー』じゃないでしょー、坂田さん。あなた何度ここに戻ってくれば気が済むの?」

銀時が眼鏡を掛けた馴染みの教官に叱責されている。馴染みの教官と言うのも可笑しな話だが。それと言うのも、銀時は度々やらかして免許取り消しを食らっているのが原因だ。

「何、今度は何やったの?」

「すいませーん。ちよっとね、忍者を撥ねちゃいまして。ええ、免許取り消し、みたいなの。」

飄々とした態度で反省の色も無く答える銀時に、流石のキノも半ば呆れ返っていた。

「どうしたら車より速く走れる忍者を撥ねられるの!? 落ちてくる隕石に当たるくらいの確率だよ!？」

「先生の教えの賜物たまものですよ。」

「教えてねーよ、そんなモン。なにちよっと先生の所為にしてんの!」

銀時の台詞に軽くイラツと来る教官。しかし忍者を撥ねたという銀時も銀時だが、忍者が車より速く走ると言う教官も教官だ。傍から聞いたら無茶苦茶なことこの上ない。まあ、銀魂の世界ではその

通りらしいのだが。

「だから『だろつ運転』はダメだって言ったでしょう！」

だろつ運転とは、『たぶん大丈夫だろつ』、『誰も飛び出してこないだろつ』等と言ったような油断しきった運転の事だ。

「かもしれない運転で行けって言ったでしょう！」

『かもしれない運転』とは教官曰く、『忍者が出てくるかもしれない』、『あの忍者はもしかしたら、右折してくるかもしれない』といった具合らしい。例がおかしい様な気もするが、そこはスルーの方向で。

「そういう気構えで運転していれば、何が起きても直ぐに対応できるでしょう！」

教官の言葉を真顔で聞く銀時。やっと真剣になってきたようだ。

「じゃあ、助手席に乗って！君に足りないのは、技術よりも注意力だから！あ、キノさんは後ろの座席ね。」

キノは助手席の真後ろの席に座る。銀時も車に乗ろうとドアを開ける。

「じゃあ、よろしくね。今日は合同講習だから。」

銀時は運転席に座っている男を見て、露骨に嫌な顔をした。

「どうも。宇宙キャプテン・カッターです。よろしくおねが……」

キャプテン・カツラ（というか桂）がおねがいますと言い切る前に、銀時の蹴りが桂の顔面に決まり、窓ガラスを砕きながら勢いよく車の外に吹き飛んだ。

「坂田さん、かもしれない運転で行けって言ったでしょー。」

『もしかしたら、合同教習の相手が宇宙キャプテンかもしれないという事態まで想定しておけとの事らしい。そんなの誰にも想定できないと思うが。』

「あー、すいません。ちょっとビックリしちゃって。」

「早くカツラさん、車に乗って。乗車前に、ちゃんと周囲確認ね。」

桂は周囲の確認を始め、手始めに車の下を覗き込む。

「もしかしたら、車の下に忍者が張り付いているかもしれない…。」

「もしかしたら、確認作業中に車が急発進するかもしれない。」

体を這いつくばらせて確認する桂だったが、銀時が車を勢いよく発進させた所為で轢かてしまった。

フラフラになりながらも、車の後ろを確認しに向かう桂。

「も…もしかしたら、車の後ろで忍者がかくれんぼをしているかもしれない…。」

「もしかしたら、車が突然バックしてくるかもしれない。」

これまた銀時が車を勢い良くバックさせて、桂に直撃する。しかし教官はさつきから窓から桂の様子を見ているだけである。助けて

やれよ、とキノが心の中でツッコむ。

「いい加減にしろ貴様！俺は真面目に免許を取りに来ているんだぞ！」

銀時のあんまりな仕打ちに耐えかね、遂に桂が声を荒らげた。

「カツーラさんはね、坂田さん。ビデオ屋の会員になりたくて免許を取りに来てるんだよ。」

「何処が真面目だ！俺だってなあ、真面目に免許取り直しに来てるんだよ！」

「…真面目な人は何回も取り直しに来ないと思うんですけど。」

実に冷静に銀時にツッコむキノ。この世界でも、やっぱりキノはツッコミ役らしい。

「かもしれない運転で行け、か。」

なるほど、キノはその理論には賛成だ。あらゆることを想定しておけば、いつ何処で盗賊に襲われても安心だ。いつもは瞬時に判断して行動しているキノだが、それを踏まえたとうえで行動すれば更に安全に旅が出来るだろう、とキノは思った。

「おお、良いよカツーラさん。初めてにしては実にいいハンドル捌きだ。」

素早くギアを切り替え、教官に褒められる桂。

「でも、ちょっとスピード出しすぎだね！」

だがカーブにもかかわらず、かなりのスピードを出す桂。その所為で右のタイヤが浮いて方輪走行になる。

桂はとんでもなく緊張しているらしく、ハンドルに思いつきり顔を近づけ、呼吸を乱している。

「お前力入りすぎなんだよ！ハンドルに寄りすぎ！かえって視界悪くなるぞ！」

「もしかしたら……」

「？もしかしたら？」

キノが訊ねる。

「俺は今、緊張しているのかもしれない！」

「『どんな』かもしれない運転』！？」「」

キノと銀時が同時にツッコむ。かもしれないどころか、完全に緊張しているのは明らかだ。

そのまま桂はフラフラと走行し、ガードレールなどに車体を擦らせたりと危なっかしい走りをする。

「さ、坂田さんブレーキ踏んで！教習車には、助手席にもブレーキがあるから！」

見かねた教官が銀時の足元を指差し、そこにあるブレーキを銀時が踏もうとする。だが、何故か桂の足がそれを妨害する。何をするんだと言わんばかりに、三人は桂を見る。

「もしかしたら…スピードを50km/h以下に落とすと爆発するタイプの爆弾を、攘夷浪士の手によって仕掛けられているかもしれない!」

「ただだけ手の込んだ『かもしれない運転』!？」

「て言うか、攘夷浪士はあなたでしょう!」

物凄い桂の妄想に、銀時とキノが交互に突っ込みを入れた。

「銀さん!知り合いならどうにかしてください!」

「できるならとっくにしてるっつーの!こいつクソ真面目だから、こういうことになるんだよ!」

そうこうしているうちに、目の前にはS字カーブが見えてきた。テンパっている桂は問答無用で直進する。

「オイイイイ!お構いなしかアアア!」

「もしかしたら…S字カーブのどこかに…」

桂の妄想劇場が、開演した。

ある和風の屋敷の広い居間に、小さなテーブルで食事をしている
壮年の男性と若い女性が居た。女性は男性の猪口に酒を注ぐ。

「すっかり寂しい食卓になってしまいましたね。夏子さんの花嫁姿、
お義母さまにも見せてあげたかった…」

「どうやら男性の娘が、嫁いで行った直後らしい。男性の後ろには、
妻の物と思われる仏壇があった。」

「てやんでえ、バーロー。娘なんてロクなモンじゃねえ。幾ら可愛
がって育てたって、みんな他所に行っちまいやがる…」

薄情なもんでえ。と付け加えて吐き捨てる。

「あら、娘ならまだここに居るじゃないですか？お義父さま。」

この女性は、男性の息子の嫁だったらしい。過去形なのは、既に
夫が他界してしまっているからだ。

男性は猪口を置き、義理の娘 松子に問いかける。

「松子さんよ…アンタ、今からでもいい。誰かいい人探したらどう
だい。」

男性の息子である夫はもう他界しているのだから、いつまでも血
の繋がっていない老いぼれの世話をする義理は無いだろう。と、男
性は言う。

松子は器量も気立てもいい。直ぐにいい人が見つかるはずだ、と
更に付け加える。だが松子は気持ちを換えようとはしない。

「こんなおばさん、貰ってくれる人なんて居ませんよ。」

そんなに私を追い出したいんですか？と、膨れっ面で言う。

「フフツ 良い縁談があれば、こんな家直ぐに出てってやるわ。」

そんな憎まれ口を叩く松子だったが、いつになっても出て行くこととはしなかった。いつも口煩く、義父の世話を焼いている。

そんなある日の夜のこと。男性は提灯を持って自分の家の近くを歩いていた。

「もういいだろう!？」

自分の家の中から、聞き覚えの無い男の声が聞こえた。提灯の灯を消し、塀の隙間から様子を伺う。提灯を消しても、満月の月明かりで充分だった。

「まだ死んだ旦那に未練があるのか！もう七年だぞ！」

君は君で、新しい人生を歩むべきじゃないのか!？と、男は松子に詰め寄る。どうやら、男は松子に結婚の催促をしているらしい。

「私はいつだって、自分の人生を歩んでいます。未練とか、そんなくだらない理由でここに居るんじゃないありません。」

松子は、男に凜として反論する。

「じゃあ何故だ！他に男が居ると言うのか!？」

そう言われると松子は口元に軽く笑みを浮かべ、こう言い放つ。

「…私には…お義父さまが居ますから…。血が繋がっていないなくても、私のお義父さんなんです…」

男性は、松子の自分に対する優しさに感動し、目頭を濡らしていた。

「というモグラたちが、土の下に居るかもしれない。」
「居るかアアアアア！しかも、無駄に長えんだよ！！」

銀時が怒鳴り、ブレーキを一気に踏み込む。車は一時停止の白線ピツタリに止まった。

「…坂田さん…よく止めたねえ…。踏切前は一時停止…グスッ」
「何で泣いてんの…。」

どうやら教官は桂の妄想劇場に感動してしまい、涙が止まらないようだ。滝のように流れている。

「「」こでも『かもしれない運転』だからね…」

『電車が来るかもしれない』、『遮断機が下りてくるかもしれない』といった感じた。まあ教習所なので、実際に線路は無ければ電

車も来ないのだが。一応形式としてやっておくとの事らしい。

「いや、ちよつと待て！」

そう言つと桂は目を閉じ、聴覚に神経を集中させる。銀時とキノは怪訝な顔で桂を見る。

「聞こえる…聞こえるぞ、電車の来る音が！」

「聞こえねーよ。」と、銀時。

「いいや聞こえる！遮断機の下りる音も、はつきりと聞こえるぞ！」

「…銀さん、お医者さん呼んだ方が良いんじゃないんですか？」これはキノだ。

そして桂は、線路の上にあるモノを見つめる。それは

「お…お義父さま！」

そう。先程桂の妄想劇場に登場した『松子のお義父さま』が踏切の線路の上に大の字で横たわっていたのだ。まあ実際は桂の妄想なので銀時たちには見えていないのだが。

「ワシさえ居なければ…松子は幸せに…」

なんと松子の幸せのため、轢断自殺を図ろうと言つのだ。あくまでも桂の妄想だが。

桂は運転席の扉を勢いよく開け放ち、お義父さまの居るらしい所へとへと駆け出した。

「今ならまだ、間に合うかもしれないイイイイイ！」

「ここまで『かもしれない』を適用する桂に、銀時とキノは冷たい目で呆れ返っていた。教官は号泣している。

刻一刻と電車は迫り、桂は最後のスパートをかける。そしてお義父さまを抱えてスライディング、間一髪、お義父さまの救出に成功した。すぐ後ろを、特急電車が通り過ぎていく。

「馬鹿ヤロオ！なんて真似してるんだ！」

お義父さまを抱きかかえて怒鳴りつける桂だったが、実際に抱いているのは赤い三角コーンだった。

「こんな事をして、松子殿が喜ぶとでも!？」

「…ワシが生きていれば、松子は不幸になる…。ワシは間違いなく松子より先に死ぬ…。そのときに一人残された松子はどうすりゃいい…。」

なんと一人二役で妄想劇場を展開する桂。その様子を、車の中から三人は冷ややかな視線で見つめる。

しばらくすると松子まで参戦し、一人三役になったらしい。

「…銀さん。やっちゃってください。」

「…そうだな。」

桂が三角コーンを抱きしめているとき、銀時が車を急発進させて

桂の後頭部に直撃させた。車は倒れこんだ桂を飛び越し、停止した。

「…坂田さん、キノさん。」

「…はい。」

「『かもしれない運転』は、もうしない方がいいかもしれない。」

「…そうかもしれない。」

三人は『かもしれない運転』にちょっとした絶望感を覚えつつ、教習車はその場を走り去っていった。

第三訓 かもしれない運転で行け（後書き）

感想等、お待ちしております。

では。

第四訓 慣れない土地で下手に動くとロクな事が無い

キノが江戸に来て二日目の夕方。新八とキノが台所で夕飯の支度をしている。神楽はテレビで『レデ ス4』を見ながらソファでゴロゴロしている。

そんなとき、自分の机に座って考え事をしていた銀時が突然叫んだ。

「しまったアアアアアア！」

「ちよ、どうしたんですか銀さん!？」

いきなりの叫び声に、新八が包丁を落としそうになる。

「今週のジャンプ、まだ買ってなかったアアアアアア！」

「そんなことで、いちいち叫ばないでくださいよ。」

どうやら愛読書のジャンプをまだ買っていなかったことに気づいたらしい。本当なら、昨日釣りの帰りに買おうと思っていたらしいのだが、キノが降ってきたりした所為で忘れてしまったとの事らしい。

「それだったら、ボクが買って来ましょうか？」

「本当か!？そうしてくれ！」

「え〜っと、この角を右に…」

エルメスに跨り、ジャンプを求めて近所のコンビニを目指すキノ。

「珍しいじゃん、お金にもならない仕事を引き受けるなんて。」

エルメスが言う。キノはエルメス曰く、基本的にはがめつい性格だ。それこそ損はしても特にならない仕事は絶対と言っていいほどやらない。稀に例外はあるのだが。

「折角お世話になってるんだしね。それに、ボクもその『ジャンプ』っていう雑誌を読んでみたいんだ。」

「さいで。」

なるほど、報酬はジャンプを読ませてもらうことらしい。会話を終えると、キノは地図を見ながらコンビニを目指して走り出した。

「ありがとうございますー」

キノはコンビニを見つけ、ジャンプを買い取ったが、コンビニから出てきたキノは手に何も持っていなかった。

「どうだった？」

「残念、売り切れだったさ。」

なんとジャンプは既に売り切れていた。流石、江戸でもトップクラスの人気を誇る漫画雑誌だ。

「どうする？このまま帰るの？」

「まさか。もう少し探してみるよ。他のコンビニなら、まだ置いてあるかもしれないしね。」

そう言つとキノはエルメスに跨り、別のコンビニを探して走り出す。

「ま、『かもしれない運転』もほどほどにしておかないとね。」

「？何それ。」

昼間に教習所で学んだことを活かし、キノはエルメスを走らせるのだった。

一時間後、キノは六軒目の町外れのコンビニでようやくジャンプを買うことが出来た。既に日は地平線に殆ど隠れてしまっている。

「お疲れ様、キノ。」

「…お腹が空いた。早く帰ろう。」

「りょーかい。」

キノは腹の音を鳴らしながらエルメスに跨ろうとする。

「キノ！後ろ！」

『ゴツ！』

「…え？」

だが、後ろから何者かに殴られ、そのまま地面に倒れこんだ。普段なら殺気を感じ取って返り討ちにしていただろうキノだが、空腹に気を取られて判断が遅れたのだ。

「キノ！しっかりして！」

「もう喋るなよ？それ以上喋ったらお前とご主人は即、あの世行きだ。」

「くっ…」

犯人に囁かれ、口を閉じるエルメス。普段は憎まれ口を叩いたりもするが、やはり本心では主人であるキノのことを大切に思っているのだ。

「…つう…銀…さ…」

倒れこんだキノは反撃の余地すら得られず、ゆっくりと意識を失った。

「キノ、ちよつと遅いアル。」
「そうだよね。どこまで買いに行ってるんだろ？」

キノがジャンプを買いに行ってから、既に二時間が経過していた。新八と神楽も流石に心配になってきた。

「銀さん、僕ちよつと見てきます。」
「ほつとけほつとけ。ガキの使いじゃねーんだ、そのうち帰って来んだろ。」

後ろ向きに座り、気だるそうに右手をひらひらと振る銀時。その態度に新八はムツとする。

「銀さんは、キノ君が心配じゃないんですか？」
「別に。アイツ拳銃持ってんだし、何かに巻き込まれても大丈夫だろ。」

「『ボクのマグナムが火を噴くぜ』的な感じアルか？」
「いや、その言い回しじゃ別の意味に聞こえちゃうから。」

神楽が危うく爆弾発言をしかける所で、新八が諫める。
銀時はあからさまにだるそうな感じのため息をつき、机から立ち上がる。

「つたく、しょうがねえな。わーったよ、捜しに行ってる。」
「銀さん……。」
「勘違いすんなよ？俺は早くジャンプが読みたいだけだ。」

キノのためではなく、あくまでジャンプを読むためだと言い張る銀時。まったく、とんだツンデレっぷりだ。

表の階段を下りると、『お登勢』の前でからくり家政婦の『たま』

が掃除をしていた。因みにこの『たま』の由来は、頭だけになったたまを神楽が拾ってきたときに卵割り機として使用していたからだ。

「銀時様、お出かけですか？レレレのし。」

箒を素早く動かしながら、たまが言う。

「何処のおじさんだお前は。」

「いえね、キノ君が帰ってこないんで、捜しに行くんですよ。」
「了解しました。では、私もお供いたしましょう。」

心当たりはありませんか？とたまが銀時に訊く。

「そうだな…。とりあえず、近所のコンビニを風潰しに行くしかねえだろ。」

『近所のコンビニ』というかなり曖昧な手がかりを頼りに、キノの捜索が始まった。

(う……？ここは…？)

キノが目を覚ますと、そこはどこかの廃ビルの一室だった。

両手は手錠で壁から吊り上げられ、口には猿轡さるくわをさせられている。

ベルトの『カノン』と『森の人』や、体中の至る所に隠し持っていたナイフは一つも残っていなかった。

部屋は五畳程の広さで、長い間使われていなかったのか、埃^{かび}つばい上に黴臭い。

(そうか…、誰かに後ろから殴られて…)

意識が消える直前の出来事を思い出していると、目の前の扉が開いて誰かが入ってきた。

「よう、お目覚めかい？」

それはしゃくれた顎にモミアゲが特徴的な男性、獅子村。アニメ版の第一話(一部の地域の方々にとっては一話と二話)に登場した、腕の立つ浪人だ。

キノは獅子村に向けてキツとして睨みつける。

「悪いが、恨むなら万事屋の連中を恨むんだな。あいつらの所為で、俺は真選組にしょっぱかれちまたんだからなあ。」

(成る程、ボクをさらったのは、銀さんたちを誘き寄せするためか…)

キノは獅子村が私怨のために自分をさらったことを理解するが、どうしても銀時が自分を助けに来るとは思えなかった。銀時にとつて、自分は『泊まる所が無かったから泊めてあげた、ただの旅人』だ。RPGで言えば序盤で『武器や防具は装備しないと意味が無いよ』とかアドバイスしてくれるくらいの存在でしかないだろう。そうになると、人質としての意味を成さない自分の末路が見えてくる。

(つまり、ボクはここで死ぬ…)

魚がかからない餌は意味が無い。意味の無い餌を付けたままにしておく釣り人は居ないのだ。人質もまた然り。

(せめて、ジャンプだけは銀さんに届けてあげたかったかな…)

見ず知らずの自分を泊めてくれた銀時にたいした恩返しが出来なかった事が、キノの唯一と言っていい程の心残りだった。

『皆様。エルメスさんを発見しました。どーぞ。』

たまが万事屋メンバーに渡しておいた通信機を通じて、エルメス発見の報告をする。

「で、何処だ？どーぞ。」

『丁目のファ リーマートです。至急急行願います。どーぞ。』

「丁目？」

丁目は万事屋から結構離れている。近所では見つからなかったのだろうと思った銀時だったが、『エルメス発見』という報告が腑に落ちなかった。

「キノはどうした？どーぞ。」
『確認できません。ですが、荷台にジャンプが括り付けられています。どーぞ。』

エルメスとジャンプのみ。その言葉に、銀時は一抹の不安を感じた。

「了解だ。直ぐに向かう。新八、神楽、急げよ。どーぞ。」
「はい！」／「了解アル！」

三人は全力でたまの元に向かって行った。

第四訓 慣れない土地で下手に動くとロクな事が無い(後書き)

感想等、お待ちしております。

別々書いている、ZOI DSS t r i k e r s もよろしく願います。

では。

第五訓 一度決めたら途中で投げ出すな（前書き）

ちよつと長くなりましたが、これで一区切り付く話です。

どしどし。

第五訓 一度決めたら途中で投げ出すな

丁目のファ リーマート。そこにはたまと、荷台にジャンプを積んだエルメスが居た。

「エルメス！キノ君は！？」

「銀さん、新八、神楽！キノが、誰かに殴られて連れて行かれた！
「本気アルか！？」

キノがさらわれた。その知らせを聞いた万事屋メンバーは、驚きを隠せなかった。

「銀時様。エルメスさんの荷台にこんな物が。」

たまがエルメスの荷台に挟まっていたという手紙を、銀時に見せる。

内容はこうだ。

『万事屋へ

貴様らの所の小僧は我らが預かった。

返して欲しくば、銀髪一人で xビルへ来い。

誰かが隠れて付いて来たり、真選組に通報などした場合、小僧の命は無いと思え。

獅子村&悪の組織 』

「銀さん！これって…！」

「どう考えても罠ネ！見え透いた罠アルよ！」

そう。これを見る限り、銀時を誘き寄せさせるための罠だ。それに犯人の名前からして、銀時に対する恨みなのは明らかだ。何故なら獅子村も悪の組織も、かつて銀時が倒した相手だからだ。

銀時は一通り読み終わると手紙を丸め、コンビニのゴミ箱に投げ捨てた。

「…まったく、空から降ってきたりさらわれたり、めんどくせえ客だぜ。」

そう言うと銀時は新八たちに背を向けて言う。

「オメーらは万事屋で待ってる。さっさと終わらせてくる。」

「銀さん！僕も行きますよ！」

「そうアル！あいつらの思い通りにはさせないヨ！」

気合十分の新八と神楽だが、銀時は二人にこう言う。

「ダメだ。オメーらは待ってる。」

「でも銀さん、それじゃあ自分から罠に掛かりに行くようなものですよ！」

「オメーらが付いて来て、キノに何かあったら困るだろーが。」
「でも…！」

どうしても銀時が心配な新八。銀時の実力がかかなりの物なのは分かっているが、それでも一人で向かわせるのは気が引ける。

「心配すんな。一度倒した連中にやられるほど、俺はヤワじゃねーよ。」

そう言って銀時はエルメスに跨ると、目的地の×ビルに向かっ

て走っていった。

「来たか…」

獅子村はキノが監禁されている部屋の窓から、銀時がやってくるのを確認する。

「さて、手筈通りに頼むぜ。『悪の組織』さんよお。」

「うむ。任せておけ。」

「イーッ!」「イーッ!」

眼帯を着け、どこかの艦長が被っていきそうな帽子を被った妙齢の男性を筆頭に、紫色のタイツを着ている某ライダーの敵の組織の戦闘員を思わせる口調で話す下っ端たち。彼らが『悪の組織』である。過去に二度、銀時に倒されている。

「者共、持ち場に着け!」

『イーッ!』

リーダーの男の指示を受け、戦闘員達が動き始める。

「じゃ、行ってくるわ。」

「気をつけて、銀さん。」

廃ビルの前にエルメスを止め、銀時が出入り口のドアノブを捻って扉を開ける。

「ちわース、三河屋です。」

そんなボケも交ぜながら、銀時が廃ビルに進入した。入った瞬間、カビ臭さが鼻を突く。

扉を開けた瞬間に襲ってくるかとも思ったが、入り口付近には誰も居ないようだ。

「何だよ、客が来たつてのに出迎えも無しかア？」

そう言つて二階へと通じる階段を上る。だが階段の踊場まで来た所で、銀時の頭上に『何か』が降つてきた。

「イーツ！」

二階で待ち伏せていた戦闘員の一人が、剣を持って飛び降りてきたのだ。落下時の加速度を利用して、鉄パイプを銀時の天然パーマ目掛けて思い切り振り下ろす。

だが銀時の反応の方が一瞬早かった。素早く右手で腰の木刀を抜いて左手を峰に当て、剣の一撃を見事に防ぐ。

「イイツ!？」

完璧に不意を突いたと思っていた戦闘員は驚きの声を上げた。

「おいおい、危ねーじゃねーか中島君？」

銀時は戦闘員の持つ剣を木刀のひと振りで弾き飛ばし、返す刀で戦闘員を斬りつけて吹き飛ばした。

「素振りなら、空き地でやりやがれエエエエ！」

戦闘員は壁に激突し、地面にずり落ちて気絶した。

「ったく、ありきたりな不意打ちしやがって。カツオでももう少しマシな事考えるぞ。」

銀時は駆け足で階段を上り、目の前にあつた扉を蹴り破る。中はそれなりに広く、机とダンボール箱が幾つか置いてある。以前はオフィスとして使われていたようだ。

「ハーツハツハツ！約束どおり、一人で来た様だな。」

もの凄くありきたりな笑い声を上げながら登場する、『悪の組織』のリーダー。

「『銭封機』せんふうきや『感電血』かんでんちのときは世話になったが、今、この時、この場所が貴様の墓場となるのだ！」
『イーッ！』

銀時を指差し、堂々と勝利宣言をする悪の組織リーダー。その後ろから、獅子村が姿を現す。

「ククク…久しぶりだな、銀髪の。」

これまた悪役のような口調で話す獅子村。まあ、実際のところ悪役なのだが。

「えーっと…誰だっけ？」

「ってオイ！忘れたのか！俺は獅子村だ！」

すっかり忘れていた銀時。まあアニメ第一話のゲストキャラな上、アニメオリジナルなのだから忘却の彼方でも仕方が無いと言えるだろう。

「ああ、もしかして多串君か？^{おおくし}あらあ、すっかり立派になっちゃって。」

「獅子村だっけってんだろーがア！」

まだ思い出さない銀時にブチ切れる獅子村。銀さんときたら、思い出せないときはいつも多串君か磯村君である。

「まあ良い、俺たちはテメーさえ殺せりゃ良いんだからな！」

「者ども、掛かれエ！」

銀時を倒すべく、四方八方から剣を持った戦闘員が襲い掛かる。

「でありやアアアア！」

だが銀時も負けてはいない。木刀を突き出して突進し、一度に五人の戦闘員を弾き飛ばすと、素早く体を反転させて後ろの戦闘員数名を袈裟斬りで弾き飛ばす。

だが幾ら倒しても次々と増援が現れ、さらに四方八方から襲い掛かるために銀時のスタミナは次第に消耗しつつあった。

(ええい、キリがねえ！どんだけ居るんだよ!?)

幾ら退けても一向に減らない戦闘員に対し、銀時にも焦りが生じ始めた。

「そろそろか…。獅子村の！」

「応！」

キノが監禁されている部屋に入っていた獅子村が、キノを連れて出てきた。

「おい銀髪！これを見る！」

「な、キノ!？」

「木刀を捨てる！さもなければ、この小僧の命は無いぞ！」

今もなお手錠と猿轡を着けられているキノに、獅子村がキノから奪った『カノン』の銃口を押し付ける。

(ダメだ銀さん！今捨てたら、間違いなく…!)

「五つ数えるまでに捨てなければ…この引き金を引くぞ！」

「チツ、姑息な手エ使いやがって…」

銀時は舌打ちをし、獅子村の言うとおりに木刀を床に投げ捨てる。それを見たキノは目を見開いて驚いた。

(な…！銀さん!?)

「これでいいのか？」

「ようし、者ども、掛かれ！」

丸腰となった銀時に戦闘員が襲い掛かり、刃で直接切らずに面の部分で銀時の体中を殴りつける。

「ぐあつ！」

(銀さん! どうして...!?)

数十人の戦闘員に甚^{いたぶ}振られる銀時を見て、キノは思っていた。何故、自分なんかのために命を投げ捨てるに等しい行動を選択したのか。木刀を捨てさえしなければ、間違いなく銀時はこんな連中を全滅させ、生き残ることができただろう。今のキノには、銀時の考えがどうしても理解できなかった。

そう考えている間にも、銀時は袋叩きに遭い続けている。獅子村は勝利を確信したのか、『カノン』の銃口をキノの頭から離している。

(どうすれば...この状況が打開できるんだ...!?)

武器を奪われた上に四肢を封じられたキノには、出来る事など何一つ無かった。

「拙い…、このままじゃ銀さんが…！」

ビルの外でエルメスは考えていた。中から微かに聞こえる音から判断すると、銀時はかなりの劣勢に立たされているようだ。助けに行きたいが、自分はモトロード。誰かに操縦してもらわない限り、自分ひとりでは出来る事など何一つ無いのだ。せめて、誰か知り合いが通りがかってくれさえすればいいのだが。

「うん？エルメスじゃねえか。」

「源外さん！」

なんとという偶然か。偶々コンビニに買い物に行っていた源外が、エルメスの前を通りかかったのだ。どうやら、キノはまだ幸運の女神には見捨てられてはいないようだ。

「源外さん、緊急事態なんだ！力を貸して！」

「何イ？どういこうった？」

エルメスは今までの経緯を説明する。

「なるほどな。そんなら、俺がこっさりお前さんに付けておいた『アレ』を使うときが来たらしい。」

「アレ…？そんなものいつの間に…！」

再びビル内部。殴られ続けた銀時は体中に痣を作り、床に仰向けに倒れている。

「そろそろトドメといくか…。」

獅子村はキノを悪の組織リーダーに渡し、自分の刀を抜いて銀時に歩み寄る。獅子村の正面に居る戦闘員は左右に動いて道を開ける。

「じゃあな、銀髪。これでトド…」

トドメだ、と言おうとしたそのとき、窓を突き破って『何か』が突撃してきた。

「うおおおっ!?!」

「な、何だ!?!」

突撃してきたそれは、悪の組織リーダーに直撃し、向こうの壁まで思いつきり弾き飛ばした。そしてキノはそれを見て、驚いた。

(え、エルメス!それに源外さん!?)

「ぶわはは!銀の字、生きてるか!」

「キノ!お待たせ!」

そう、突撃してきたそれは、エルメスに乗った源外だった。しかもエルメスの後部には何やらジェットブースターが搭載されており、その推力によって二階のこの部屋に飛び込んできたのだ。

「これぞ俺がこっそりエルメスに搭載しておいた、『ブツ飛びジエ

ツト』よ!」

「まったく、人が寝てる間になんて物くつつけてるんだらうね…」
「つーか、おめーは人じゃねえだろ。」

そんな事を喋りながら、源外はキノの猿轡を外している。

「プハツ！源外さん、どうしてここに？」

「おう、ちいと買い物のおいでにな。」

いきなり現れた援軍に、銀時も戦闘員も、獅子村さえも驚いていた。

「おい銀の字、とつと起きてキノの手錠を壊しやがれ。」

「まったく、怪我人になんて口叩きやがるんだ、このジジイは。」

傷だらけの体を押して体を起こし、近くに落ちている木刀をサツと拾い上げると、獅子村の横を素早く通り過ぎ、キノの手錠を破壊した。

四肢が自由になったキノは、すかさず悪の組織リーダーの手から離れて床に落ちている『カノン』を回収する。

これで獅子村たちの切り札である人質は無くなり、銀時にキノという援軍が現れた。つまり、形勢逆転である。

「き、貴様！卑怯だぞ！一人で来ると言ったではないか！」

「うるせーな。俺はこんなジジイ、呼びつけた覚えはねーよ。」

「と言うか、ボクを人質に取っておきながら、それは無いでしょう？」

銀時たちを卑怯者呼ばわりする悪の組織リーダーに、冷たくも鋭い視線を送る銀時とキノ。その威圧感に、獅子村を始め全員が震え

でした。

「じゃ、俺はそろそろ帰るわ。もうすぐ真選組が来るからな。」

「え?」

「じゃあな、銀の字。俺のことは言つなよ。」

そう言つて、素早く部屋を出て裏口に向かつて走り出す源外。源外も一応は指名手配犯なので、武装警察である真選組に見られる訳にはいかないのだ。

源外が裏口から出て暫くした頃、源外が飛び込んできた窓が突然爆発した。

「うおおっ!?!」

「うわっ!」

銀時とキノ、それに獅子村たちその場に居た全員が、あまりにも突然の出来事に驚いた。

その直後、階段をもものすごい速さで駆け上がってくる音が聞こえ、扉のあつた場所から何者かの怒号が飛び込んできた。

「御用検めである!真選組だア!!」

怒号を放つた本人、土方十四郎ひじかたしゅうしろうを筆頭に、武装警察『真選組』の隊士がなだれ込んで来た。

隊士に端から検挙されていく『悪の組織』に獅子村。こうして、キノ誘拐事件は幕を閉じたのだつた。

完全に日は沈み、辺りはすっかり夜になっていた。真選組の事情聴取は明日行うことにしてもらい、キノを含めた万事屋一行は帰路についていた。

そして万事屋の前に着いたとき、キノは銀時に問いかける。

「あの…銀さん、一つ聞いても良いですか？」

「何だ？」

「何故銀さんは、自分の命を捨てるような真似をしてまで、ボクを助けようとしたんですか？」

キノが今日、一番思った事であり理解できなかった事を訊く。その質問に対し、銀時は頭を掻いて答えた。

「一度面倒見るって決めたモンを途中で投げ出せるほど、俺は人間出来てねーんだよ。だから、お前を見捨てるわけにはいかなくてな。」

そう言っつて、銀時は最後に一言だけ付け加える。

「それが俺たち、『侍』の生き方だ。」

それを聞いたキノは、自分の心臓がドクン、と脈動したのを感じた。銀時は自らを『侍』と言った。キノはその言葉に特に心を惹かれたのだ。どんな事があるつと自分の信念は曲げず、それを信じて突き進む。それが -

「侍という、存在…」

キノは今この時、ある決心をした。

「エルメス。」

「なんだい、キノ？」

「ボクは…もう少しこの国に居ようかと思っただ。」

エルメスはその言葉に、心の内で驚いた。普段は一つの国に三日しか滞在しないキノが、珍しくここにもう少し留まりたい、と言っただ。

「もう少しって、どのくらい？」

「…分からない。でも、明日直ぐには国を出たくないんだ」

「…さいで。」

外で話をしているキノとエルメスに、二階から新八が呼びかける。

「二人ともー。早く来ないと、神楽ちゃんがご飯全部食べちゃうよー。」

「それは困るな。今行きます。」

神楽に夕飯を食べられまいと、エルメスを『お登勢』にしまって急いで万事屋の中に走っていくキノ。

その後、キノはもう少し留まるという旨を銀時たちに伝える。新八と神楽は大賛成で、銀時は面倒くさがりながらも承諾した。

「ま、もっと長く居候するんなら、万事屋の一員になって働いてもらうぜ？」

「はい。では、これからもよろしくお願いします…!」

こうして、キノとエルメスはめでたく万事屋のメンバーになり、江戸の町で暮らしていくことになったのだった。

第五訓 一度決めたら途中で投げ出すな（後書き）

ようやくキノが万事屋の一員になる所まで書けました。
感想等、お待ちしております。

では。

第六訓 最近の物語には拳銃使いと剣士が必ず居る（前書き）

今回は遂に、あのコンビが登場します。

第六訓 最近の物語には拳銃使いと剣士が必ず居る

私はの名前は陸、犬だ。白くて長い、ふさふさの毛を持っている。いつも楽しくて笑っているような顔をしているが、別にいつも楽しくて笑っている訳ではなくて、生まれつきだ。

私のご主人、シズ様はいつも緑のセーターを着た青年で、複雑な経緯いきさつで故郷を失い、バギーで旅をしている。

そして私は、シズ様と共にある。

ある曇り空の日のこと。いつもの様にバギーで旅をしていた私とシズ様は、目の前から迫り来る脅威に気がついた。大地から天へと伸びる巨大な柱のようなもの、竜巻だ。

シズ様はすぐにバギーの進路を変更して回避しようとしたが、逃げ切れずに巻き込まれてしまった。

そのとき私はもう駄目かと思ったが、どういつ訳か奇跡的に生き延びたらしい。そして目が覚めたとき、私とシズ様は『真選組』という警察組織の屯所に居た。

密林に棲む野生動物のような顔をした男 どうやら真選組局長らしい の話によれば、私とシズ様はバギーごと近所の川に降ってきたらしい。

その報せを受けた真選組が、私達を引き揚げて保護してくれたのだと言う。

「ほほう、シズ殿はバギーで旅を？」

「ええ。とは言っても、当ても無ければ行き当たりばったりの旅ですが。あまり自慢できた物ではありませんよ。」

「いえいえ、色々な物を見て回るのは良いことです。私も旅に行きたいのですが局長という身分故、ここを離れる訳にいかず…。そういう点では、あなたが羨ましいのですよ。」

「どうやらこの近藤という男は、シズ様と馬が合うようで会話に花が咲いている。」

「ん？そういえばトシは何処行っただ？」

近藤は副長の土方が居ないことに気が付く。

その頃土方は…

「まったく、何でテメーは毎度毎度トラブルばっか引き起こすんだ。そんなにトラブルが好きなのかテメーは。」

事情聴取をしている土方が銀時に文句を言う。

「ああ？確かに俺アTO LOVEるは好きだけどよあ、ちゃんと他のも読んでんだよ。ワンピースとかぬらりひょんとか。」

「トラブルだ！テメー、糖分の摂取し過ぎで遂に脳味噌にまで浸食したんじゃないのか？」

ボケ倒そうとする銀時に土方が突っかかる。すると銀時も額に青

筋を浮かべて言い返す。

「アアン!? 全身もれなくニコチン中毒のテーマに言われたか無エなア!」

「んだとオ、この天然パーマ!」

「やんのか、このチンピラマヨラー!」

お互いの顔がかなり近づき、心なしか目と目の間に火花が見える気がする。

「ちょ、ちよつと銀さん。ボクたちは一応事情聴取に来てるんですよ? 警察官相手に何を…」

キノが銀時を諫めるが、そんな物はお構い無しに土方を睨み付ける。

「いーんだよ、コイツは。どうせ顔見知りなんだ。」

「そうは言っても…って、顔見知りだったんですか?」

銀時の発言に驚くキノ。だが顔には殆ど表れない。

「成る程…。銀さん、既に前科持ちだったんですね。」

「違いよ。只の腐れ縁だ。」

キノが本格的に勘違いをしだす前に、誤解を解く銀時。

「それで万事屋、そっちの嬢ちゃんとはどついつ関係なんだ?」

脱線した話を元の線路に戻す土方。

「あーアレだ、ウチの期待の新人だよ。」
「ほー、新人ねえ…」

土方がキノをまじまじと見つめる。

「…？どうかしましたか？」

「アンタもよくこんな奴の所に就職する気になったな。」

キノは土方に言われた事を多少は理解した。確かに銀時は時々、
と言うかしょっちゅう駄目人間臭い所はある。だが、それは多面体
である銀時のほんの一面しか見ていない人間の意見で、キノの意見
は違う。

「確かに、銀さんはいつもはこんな調子ですけど…昨日ボクを助け
てくれたことで、本当の銀さんが見えた気がしたんです。だから、
ボクは万事屋に就職しようと思いました。」

キノが銀時に下した評価を聞き、土方は内心驚いていた。

(このガキ…、人を見る目はあるみてえだな。)

口にこそ出さないが、土方も銀時の事は高く評価している。仲間
を思う気持ち、自分の信念を貫き通そうという執念。だが、土方の
意地っ張りな性格の所為でそれが明言される事はまず無いのだ。

「おーい。世間話はその辺にしてよオ、とっとと事情聴取終わらせ
ようぜ。」

待ちきれなくなった銀時が口を出し、ようやく本題の事情聴取が
始まった。

約一時間後、事情聴取を終えた銀時とキノは屯所の正門前に居た。表に停めておいたエルメスに声を掛けると、遅いと文句を言われた。

「あー疲れた。帰りにパフェでも食って行こうや。」

「良いですね。」

銀時の提案に同意するキノ。新八から、銀時は糖尿の気があるの
で気をつけるように言われていたが、甘いもの好きは自分も同じな
ので敢えて咎める事はしなかった。「それでは、お世話になりました。」

「いえいえ、道中お気をつけて。」

銀時達のすぐ後ろで、話し声が聞こえた。一人は真選組の密偵、
ザキさんこと山崎退。もう一人は銀時には聞き覚えの無い声だった
が、キノには心当たりがあった。

まさかと思いながら、キノは振り返る。

「…シズさん？」

キノの声を聞いて、男・シズはキノに気が付いた。

「おや、キノさん。奇遇ですね。」

まさかこんな所シズが来ているとは思っていなかったキノは、暫く固まっていた。

第六訓 最近の物語には拳銃使いと剣士が必ず居る（後書き）

ご意見、感想等、お待ちしております。

第七訓 人の過去は訊き過ぎるな（前書き）

お待たせしました！遂にテストが終了したので、第七訓を投稿します。

第七訓 人の過去は訊き過ぎるな

銀時はキノとキノの知り合いらしい男、シズと一緒によく行く近所のファミレス『バトルロイヤルホスト』でパフェを食べていた。エルメスは店内に入れない為、シズのバギーや同じく入れなかった陸と一緒に店の外に停めてある。

「で、何？二人はいつたいどういった関係で？」

銀時は自分が食べているパフェのスプーンをマイクのように構え、キノとシズに突き出す。

「いや、どういった関係と言われても…」

「そうですね」

頬を人差し指でポリポリと掻きながら微笑するシズ。

「ちよつと前に殺し合った仲、としか言えませんね。」

「ええ。」

「殺し合った…？」

昔話の様に軽く言うシズだが、それを聞いた銀時は怪訝な顔をす。シズは話を続ける。

「私達が出会ったのは、ある国の市民権を賭けた勝負の決勝戦でした。」

「その国のルールで、入国した瞬間、なし崩しに勝負への参加が決定してしまうんです。」

ボクもその一人でした、と付け加えるキノ。銀時はパフェをゆつくり食べながら聴いている。

「私とキノさんは共に勝ち進み、決勝戦でぶつかりました。」

「ふーん、お前ら随分と強かったのな。」

感心したように銀時が言う。

「そういう貴方も、なかなかの実力者とお見受けしますが？」

「よせやい、俺アそんなんじゃないよ。」

まだほんの少ししか一緒に居ないのにも関わらず、銀時の力を見抜いたシズ。恐らく、普段は隠している銀時の本当の実力を、体格や態度からなんとなく感じ取ったのだろう。

「で？どっちが勝ったんだ？」

「その時はボクが勝ちました。と言っても、かなりギリギリでしたけど。」

キノは自分のパフェの溶けかけているアイスに気付き、急いで食べる。

「で、今ここに居るって事はその国に住まなかったのか？」

「ええ。その勝負のルールを決めた張本人…国王を狙撃して逃げました。形式的には流れ弾ですけど。」

「…おいおい、随分と物騒な話だなア。俺のことは狙撃するなよ？」
「さあ、どうでしょうね。」

キノの口元が僅かに微笑む。そんな談笑をしているうちに、三人はパフェを食べ終えて席を立った。

「お待たせ、エルメス。ノ陸。」

表で待たせていたエルメスと陸に声を掛け、キノはエルメスの、シズはバギーのエンジンを点火させる。

「で、オメーはこれからどうすんだ？」

銀時が後輪のカバー部分に『銀』と書かれた、自分のスクーターのエンジンを掛けながらシズに訊く。

「そうですね…。どうやら私の持っているお金は使えないようですし…」

バギーの扉に寄りかかり、腕を組んで考えるシズ。

「銀さん、万事屋は…」^{ウチ}「馬鹿言え、どっかの大飯食らいが増えたお陰でウチの家計は火の車なんだよ。」

これ以上増えたら車がウエルダンになっちまう。と付け加える銀時。

と言うことで第一候補万事屋、不可。

「お二人共、お気になさらずに。宿くらい、自分で何とかします。」

「だいたい、そのポンコツと同じ所に住むなどまっぴらゴメンだ。」

シズの後ろに居た犬の陸が言う。それを見た銀時は驚く。

「うおっ！？犬が喋った!？」

「陸は喋れるんですよ。」

「なんだよ、犬が喋って悪いか？天然パーマ。」

「ああ？やんのかコラ、どこぞのエロ仙人みてえな声しやがって。」

早速喧嘩腰ケンカになる銀時と陸。陸はシズに、銀時はキノに諫められて睨み合いを止める。

「ね、こいつムカつくでしょ？前なんか、僕の事をポンコツなんて言ったんだ。」

「確かにムカつく奴だな。でもお前がポンコツなのは、俺もそう思うぞ。」

「……さいで。」

エルメスは銀時にまでポンコツ扱いされ、かなり凹へこんだ。

「あ、居た居た。おーい、シズさーん!」

と、そこへ山崎が手を振りながら走ってきた。

「山崎さん。どうしました?」

「いやね、確かシズさんの持つてるお金が使えないって言ってたでしよう?」

「ええ、まあ……。」

山崎の意図が掴めず、シズは怪訝な顔をする。

「単刀直入に言いますが…シズさん、真選組ウチに就職しませんか？」

ハッキリと言い切る山崎に対し、シズ達はポカンとなった。

「何故、そのような事を？」

「いやあ実はですね、ウチの隊士が一人、両親が危篤とかで辞めちゃいましてね。その穴埋めにシズさんをと。」

山崎の話によると、その隊士はそこそこ腕が立つ人物だったらしい。要するに、抜けた戦力の補強という訳だ。

「はあ…それにしても、何故私を？」

シズは疑問に思う。確かに、真選組は故郷（この場合は武州）が同じ者が多く、人脈も狭くはない。隊士一人くらいなら直ぐにでも呼べる筈だ。シズはそう思ったが、実際は違っていた。真選組は世間でも『チンピラ警察』と呼ばれる程、評判がすこぶる悪く、入隊希望者が限りなくゼロに等しい。故に、たとえ一人の欠員が出てもその穴を埋めるのが難しいのだ。勿論シズはその事を全く知らない。

「それがウチの局長…さっきのゴリラみたいな人にですね、シズさんは腕が立ちそうだから、呼び戻してきてくれって頼まれたんですよ。」

つまり、現場の警察組織の長からの直々のご指名という訳だ。

シズは少し考えて、「分かりました。行ってみましょう。」と言った。

良い返事を聞いた山崎は大層喜んだ様子で、シズを連れて真選組

の屯所へと帰っていった。

「で、そのシズさんは真選組に就職したんですか？」

夕方、万事屋に帰ってきた銀時とキノは新八と話している。

「まあな。でも、そのうち辞めるかもしれないけどよ。」

「シズさんが求める国って、ハードル高いですからね。」

そう言いながら、ソファーに寝転がってジャンプを読む二人。銀時は今週号を、キノは銀時が捨てずに溜めている今までのジャンプを端から読んでいた。

「…なんかキノ君、銀さんに似てきてない？」

「気のせいですよ、きつと。」

三日程度しか滞在していないにも関わらず、銀時と似てきているキノの将来に一抹の不安を覚える新八であった。

その頃、真選組屯所の一室では入隊が決まったシズが近藤や土方、それと一番隊隊長の沖田総悟に入隊の挨拶をしていた。

「では、これからよろしくお願いします。」

「よしよし！分からない事があつたら、何でも訊いてくれ！俺がバツチリ鍛えてやろう！」

久しぶりの新人に張り切る近藤。だがそのテンションに水を差すかの如く、土方が異議を唱える。

「待ってくれ近藤さん、わざわざアンタが教育係をやる必要は無エ。俺に任せてくれ。」

いくらゴリラ顔と言えど、近藤は局長という立場だ。そんな仕事は部下に任せてくれ、と土方は言いたいのだ。だがこの意見には沖田が異議を唱える。

「いやいや、土方さんに任せたらシズが受動喫煙でニコチンに侵されちまいますア。ここは俺が……」

沖田曰わく、土方はヘビースモーカーであるため、シズの健康状態が悪化すると言う。なので、自分が引き受けると言い出す。

サボリ魔の沖田にしては、珍しくやる気が見える。

「馬鹿言ってんじゃねエ、テメーと一緒に居たらシズまでDSになつちまうだろーが。俺に任せろよ。」

「それを言ったら、土方さんの影響でシズがマヨラーになりかねま

せんがねエ。」

「マヨネーズのどこが悪いんだよ。マヨネーズは人類が生み出した至高の食品だろーが。」

「少なくとも、丼飯どんぶりにぶちまけて食べるモンじゃあありやせんねエ。」

「マヨネーズは何にでも合うように出来てんだよ。」

まるで小学生の様に口喧嘩を始める二人に見かねて、近藤が仲裁に入る。

「おい止める二人共、シズ君が見てるだろう！そんなに喧嘩するんだったら、俺が貰います！」

「アンタはどここの母ちゃんだ！」

仲裁に入ったはずの近藤まで口喧嘩に参戦してしまい、收拾が着かなくなりつつ…いや、最早手遅れだろう。

その様子を見ていたシズはクスリと微笑しながら、「やれやれ、これから面白くなりそうだ」と思っていた。

第七訓 人の過去は訊き過ぎるな（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第八訓 三度目の正直で成功するなら誰も苦労しない(前書き)

明けましておめでとございます！

前回の投稿からかなり間が開いてしまいましたが、やっと書き終わりました。

もうね、この年末は大変でしたよ。爺さんが入院したり母が入院したり…十ウン年生きてきて一番忙しい年末でした。

さて、自分の近況報告はこれくらいにして、第八訓をご覧ください。

第八訓 三度目の正直で成功するなら誰も苦労しない

「アレ？何だろうコレ。空が真っ黒だ。

「アレ？…真っ黒なのはボクか。

「アレ？こんな事原作でも何回か無かったっけ？

「アレ？

キノが目を覚ますと、そこは万事屋の居間ではなく（銀時が自分と同じ部屋で川の字になって寝るのはマズいだろうと判断したため、居間に布団を敷いて寝ることにした。）、「何処とも分からない謎の空間だった。

風景は無く、ただ真っ暗な景色が広がるだけだ。明かりが無いのかとも思ったが、自分の姿だけはハッキリと見えていた為、すぐにその考えは放棄した。

キノは身体を起こして自分の服装を見ると、いつの間にかワイシヤツに長ズボンのいつもの格好になっていた。

そして辺りを見回すと、すぐ隣には『お登勢』の横に停めていた筈のエルメスが居た。

キノはエルメスをいつもの様に叩き起こした。

「…おはようキノ。…ってアレ？ここ何処？」

「おはようエルメス。分からない、目が覚めたら此処に居たんだ。」

エルメスも気がついたら此処に居たらしく、手掛かりにはならなかった。

「それにしても、真つ暗な場所だね。風情も何もあつたもんじゃない。」

「…こんなときに風情も何も気にならないと思っけど。」

キノとエルメスが雑談をしていると、遠くから何かの音が聞こえてきた。

「…ッ、エルメス、ちょっと黙ってて。」

キノは耳を澄ませて何の音かを判断しようとする。金属が床を踏み締める様な音だ。

「…ロボットか？それも二足歩行の。」

こちらに近付いているらしく、音はどんどん大きくなっていく。

キノは腰の辺りを探って『カノン』か『森の人』を構えようとするが、どちらも腰に下がってはいなかった。

マズい、とキノは感じる。そして、遂に何者かが姿を現した。

「よう、起きたみてえだな。」

そう言ってキノの前に姿を現したのは、身長一メートル強で右腕

に銃口を一つ、左腕に二つ持ち頭にはカブトムシの様な角を生やしたオレンジ色のロボット（CV：竹内順子）だった。

「…君は？」

「おいおい、つれねえなあ。幾度もピンチを乗り越えてきた仲じゃねえかよ。」

そう言われるが、キノは今一つピンとこない。だがエルメスは、なんとなく気が付いたようだ。

「…もしかして、パースエイダー？」

「おっ、正解だぜ。俺はパースエイダーの『カノン』だ！」

キノは自らを『カノン』と名乗る存在に、顔に出さずに驚く。そして昔、キノは自分の師匠から聞いた事を思い出した。職人が丹精込めて作り上げた一品には、何にでも職人の魂が宿っているのだと。

「つまり…君は『カノン』に込められた職人の魂って事？」

「そうだな…そう考えてもらっていいぜ。」

「で、その魂さんが何のご用で？」

エルメスが訊ねる。

「ああ、時間も無エから単刀直入に言うぜ。俺はお前に必殺技を教えるために、お前等呼び出したんだ。」

「…必殺技？」

必殺技。それは少年マンガにおいて最重要要素の一つであり、主人公を筆頭にメインキャラや刺客がほぼ必ずと言って良い程持っているものだ。（CV：立木文彦）

「どうだ？教えてほしいだろ？なんせ必殺技だもんな。」

「…別にいいよ。」

「…え？」

キノの発した言葉に凍り付く『カノン』。あまりに予想とかけ離れた回答だったのだろう、自分の聞き間違いかとも思い、もう一度聞き直す。

「…え？いや、今なんて…」

「別にボクには必殺技なんて必要ないよ。今までだってそれで何とかなってきたし。」

そう言われた『カノン』は愕然とした。まさか、いくらドケチなキノとはいえ相棒の提案を遙か彼方へ、イチロー並みのレーザービームで放り投げるとは思わなかった。

「な、何言ってるんだよ。必殺技ってのは、そりゃあもう強力な技なんだぞ？ほら、昨日読んだジャンプにも載ってただろ？『月牙天衝』とか『デビルバットゴースト』とかさ！」

両手をブンブンと振り回して食い下がるが、それでもキノは興味が無さそうだ。

「いや、だからいいって。それより僕、早く元の場所に戻りたいんだけど…今日僕食事当番だし。」

「待って待ってエエ！もう少し、もう少しだけ話を聞いてくださいよ奥さん！」

どごその訪問販売のセールスマンの様な口調で話す『カノン』。

「誰が奥さんか…しょうがない、もう少しだけね？」

「ホント頼むぜ。おおい、『森の人』に『フルート』！ちよつと来てくれエエエ！」

(…他にも居るのか…)

『カノン』が暗闇に向かって叫ぶと、何かが近づいてくる音が聞こえてきた。

「なんだなんだ、どうしたんだ？」

現れたのは、ピチピチのボディスーツ姿のなんかダンボールに隠れていそうな男性と、服を着た類人猿の様な男性だった。

「ちよつと待ったアアア！」

「なんだよキノ？」

ボディスーツ姿の男性『フルート』と類人猿の様な男性『森の人』を見たキノが叫ぶ。

「おかしいでしょその二人！『フルート』はともかく、『森の人』はどう見ても空知じゃん！」

そう、『森の人』の姿がどう見ても銀魂の原作者である空知にか見えない、と言うかまんま空知である。

「何言ってるんだよ、『森の人』ってのはマレー語だとオランウータンって言うんだぜ？」

「いや、これオランウータンじゃなくて空知…もういいや、さっさと始めて終わらせようか…」

溜め息を吐いて諦めるキノ。

「そんなじゃ『フルート』、頼むぜ。」

「よし、俺が最高の必殺技を見せてやる！」　そう言って『フルート』はキノの目の前に立つ。

「一番『フルート』、必殺技をやります！」

宴会の一発芸をやるような言い方だが、キノは敢えて突っ込まない。

『フルート』はどこからともなく薄茶色の箱を取り出すと、自分の体を丸めて箱の中にすっぽりと入ってしまった。

「必殺、『ダンボール隠れ』」

「……いや、それ技であっても必殺じゃないでしょ。」

「て言うか地味だね。必殺技ってもっと派手な物じゃなかったっけ？」

ただダンボールに隠れるだけで、破壊力も派手さすらも無い必殺技を見て思い思いの感想を述べるキノとエルメス。

「……やっぱり『フルート』は地味だったか……。じゃあ次は『森の人』！」

『フルート』はダンボール箱に入ったまま後ろに下がり、入れ替わりで『森の人』が前に出て来る。

『森の人』はおもむろに懐から何かを取り出す。手に握られていたのはタバコであった。『森の人』はその数本に火を着けて口にくわえ、しばらくタバコを味わう。

キノが怪訝な表情を浮かべていると、『森の人』はくわえているタバコを口から離し、口から吐き出した煙で輪を作った。

「必殺、タバコの輪っか！」

「だからどこが！？殺傷能力の欠片もないよ！」

普段は冷静なキノも、声を上げるほどに突っ込みをいれた。

「甘いな、この煙を敵に掛けてガッツを奪うんだよ。」

「モンターファームか！今時分かりづらいよ！て言うかアンタ達、さつきから宴会場での必殺技ばっかだよ！」

「んだよテメー、さつきから文句ばかり言いやがって……」

キノは正しい事を言っている筈だが、何故か逆ギレする『カノン』。そして遂に、『カノン』が立ち上がった。

「よし分かった、こうなりや俺様がお前の望む必殺技を見せてやるってばよ！」

そう言つと『カノン』は全身に力を込め、唸り声を上げ始める。

「オオオオオオオオオ……」

「く……！なんて気迫だ……！」

『カノン』の全身にオレンジ色のオーラが纏われ、その気迫と力強さに思わずキノも後ずさる。

そして『カノン』は力を込めたままオレンジ色に輝く両腕を前に突き出し、必殺技を発動させる。

「どおりやああああ……！」

「ぬわあああああー!!」

両の掌てのひらからオレンジ色の光線が飛び出し、偶々正面に居た『フルート』に直撃した。『フルート』はそのまま力無く、うつ伏せに倒れ込んだ。

「凄い…いろんな意味で。」

「て言うか、大丈夫なの？アレ…」

キノの指差した先には、必殺技をモロに受けてウエルダンになった『フルート』の姿があった。

「へーきへーき、あの程度じゃアイツは死なねーよ。それよりキノ、お前もやってみるよ。」

「アレを？…コツとかは？」

キノからアドバイスを求められ、『カノン』は腕を組んで考える。

「えーっとそうだな、取り敢えずオレの言つとおりに体を動かしてみろ。」

そう言つと『カノン』は近くの本棚から分厚い一冊の本を取り出して開く。本の表紙には『できる必殺技〜大丈夫、ファミ通の攻略本だよ〜』と書かれている。

「ここに来て攻略本頼み！？覚えてるなら、自力で教えてよ!」
「うるせーな、感覚で覚えたから教え方忘れちまったんだよ。」

えーっとメダフォース、メダフォース…と言いながら『カノン』はページを捲めくっていく。

「いや、メダフォースって言ってるじゃん！メ ビーか、やっぱア
ンタメ ビーだろ！」

「いちいち細かい事気にしてんじゃねーよ。大丈夫大丈夫、人間で
もその気になりや使えるから…っつと、あつたあつた。」

メ ビー…もとい『カノン』は開いたページを固定し、キノに指
示を出す。

「まずは気をつけの姿勢から右足を半歩前に出して、その足首を右
に90°捻る。」

キノは取り敢えず、『カノン』の言うとおりにする事にした。

「んで両手を臍へその前に持ってきて、体の前で半円を描くように頭の
上に移動させる。」

言うとおりにするキノ。

「で、左足は膝を直角に上げつつ、体をつま先の向いている方向に
捻りなおかつ、頭上の両手は胸の前に移動！」

と、この『カノン』の指示通りに動いたところ、キノは何かを思
い出しかける。

(何だろう…この動き、昨日見たような…)

「その体勢から元々向いていた方角に体重を移しつつ左足を突き出
して…」

キノの脳裏に僅かながら記憶の断片が蘇る。

昨日の晩、銀時と一緒にテレビを見ていた。

『さあ八回終わって4対3、遂にエイリアンズ一点リードに変わりました。マウンド上には守護神グルーン。第一球、投げた！』

「最後に腰の回転を利用して右腕を…振り抜く！」

- そうだ、この動きは -

キノは腕を振り抜き、その手から放たれた白く輝く球体はいつの間にか目の前に居た『森の人』のミットの中に、ズバン！という音を立てて収まった。

その瞬間、キノは昨日見たものを完全に思い出した。

「スットライイイイク！」

「やったぜキノ！一発で完成だ！」

必殺技を習得したキノに喜んで駆け寄る『カノン』。だがそれに対してキノは -

「ってこれ、ピッチャーの投球フォームだろーがアアアア！」

- 盛大な跳び蹴りを『カノン』の顔面に食らわせました、とき。

第八訓 三度目の正直で成功するなら誰も苦労しない（後書き）

ご意見やご感想、お待ちしております。

第九訓 私を水道橋に連れて行って（前書き）

このところ更新の間隔が開いてしまつて申し訳ありません。
ゆっくりとお付き合い頂ければ幸いです。

第九訓 私を水道橋に連れて行って

キノが自分の相棒達から必殺技を伝授されて3日が過ぎた。空は蒼く澄み渡り、小鳥の囀りが聞こえてくる。が、相変わらず万事屋に仕事は来ないままだった。

だがそんないつもの日常は、十数分前に終わりを告げた。そう、久しぶりに依頼が入ったのだ。これでやっと美味しい食事でありつけるといふものだ。

さて、その依頼の内容とは…

「野球…ですか？」

「ああ。アタシの知り合いのジジイが所属してる草野球チームが、今度大会に出るんだよ。でも主力メンバーが骨折だのなんだの出てなくなっちゃったのさ。」

万事屋のある一戸建ての一階部分にあるスナック『お登勢』。そのオーナー兼万事屋の大家であるお登勢の話を銀時たちが聞いている最中だ。

キノはここまでのお登勢の話を聞いて、依頼内容を察した。

「つまり、ボクたちにそのチームの助っ人をお願いしたいって事で

すか？」

「そうさ。銀時、やってくれるかい？」

お登勢はタバコを噴かしながら、銀時の横顔を見て訊ねる。何故横顔なのかというと、例によって銀時はお登勢にそっぽを向いて真面目に話を聞いていないからだ。

「ああ？何でそんな事、俺がしなきゃならねーんだ。」

万事屋らしからぬ発言だが、これがいつもの銀時である。

「大体、大会なんざ来年もあんだろーが。今回は運が無かったと思つて諦めさせりゃ……」

「銀時、アンタ確か家賃二ヶ月分滞納してたね？今ここで請求しても良いんだよ？」

お登勢も銀時とは長い付き合いだ、ちよつとやそつとじゃ銀時が承諾しないというのは重々承知している。そこで、こういう時は家賃を催促したり、色々な策を使って銀時の重い腰を上げさせるのだ。

「…ちつ、わーったよ。で、何人足りねーんだ？」

「こいつア酷エな。」

依頼先の草野球チーム、歌舞伎町サンダーズが普段練習をしているグラウンドにやって来た万事屋一行は、最悪のチーム状況を見て溜め息を吐いた。

まともな状態のメンバーは二塁手セカンドで依頼人の仰木、三塁手サードの有籐、中堅手センターの福本の三人だけだったのだ。万事屋メンバーだけで事足りると思っていた銀時達は、いきなり問題にぶつかってしまったという訳だ。

「済まんのう、残った人数を言うのを忘れとったわ。」

「忘れとったわ、じゃねーよ！三人じゃあ、キックベースすら出来ねえじゃねーか！」

仰木の言い種に突っ込む銀時。確かに三人ではキックベースどころかまともな練習も出来ない。家に帰って桃鉄をやる分には問題ないが、今回はそんな話ではないので結局問題がある。

「じゃあ後二人か…」

「あ、それと大会規定で控えが三人おらんとエントリーは出来んからよろしくな。締め切りは三日後じゃ。」

「オイオイ、マジかよ…めんどくせえルールだな。」

「喚わめいてもしかたありませんよ銀さん。最低でも後五人探して来ないとい…」

「ちっ、しゃーねーか。」

という事で、先ずは眠れる戦力を求めて手当たり次第に当たっていく事にした。

一人目はお登勢に頼んで、試合の日だけたまを借りることで解決した。

次はマダオこと長谷川が寢床を作っている公園に行き、長谷川を誘ってみた。

「野球？ああ良いぜ。ちょうど暇してたんだ。」

一発で長谷川の獲得に成功した。

「暇ってオメー、今日は火曜だぞ？仕事はどーしたんだよ。」
「うっ…いやそれは…」

長谷川の顔が少しだけ動揺した表情に変わる。

「銀ちゃん、コイツまた無職になったアルよ。マダオはいつまで経っても所詮マダオって事ネ。」

「そんな事ねえよ！マダオだっていつかは開花する時がくるんだ！少なくとも、俺はそう信じてる！」

毒を吐く神楽に必死でまくし立てる長谷川。だが神楽はどこ吹く風でまるで真面目に聞いていない。

万事屋一行は長谷川の心に傷跡を刻みながらも、次の戦力を探しに移動していく。

次にやって来たのは新八の自宅の道場。ターゲットは勿論、新八の姉の妙である。

「え？野球？」

「お願いできませんか、姉上？」

新八が訊ねる。

「そうねえ…でも、私に出来るかしら。」

頬に左手を当てて謙遜する妙。

「オメーの圧倒的破壊力なら、どんな速球もホームラン出来んだろ？」

「もう銀さんったら、そんなに煽おたてないですよ。どこかのストーカーゴリラじゃあるまいし、私はそんなにパワフルじゃないわよ？」

「そのストーカーゴリラを毎回フルパワーで撃退してるのは、どのどいつだ？説得力の欠片もねーんだよ、今更乙女ぶっても。」

そう言った直後、銀時の顔の真横をどこからともなく現れたジャスタウエイが、メジャー級のスピードで通り過ぎた。前を見ると、ニコニコと笑顔を絶やさない妙の姿があった。その右腕は何かを投げ、振り下ろされた後のようだった。

「残念だけど、私には自信が無いわ。ごめんなさいね。」

ジャスタウェイをフルパワーで投げおきながら、物凄い事を言う。だがそれを実行するのが、志村妙という女性なのだ。

「代わりと言ってはなんだけど、九ちゃんに頼んでみるわ。」

そう言って妙は電話に向かって歩いていく。

妙の言う九ちゃんとは、妙の幼なじみである柳生九兵衛の事だ。剣術の名門である柳生家の一人娘で、江戸でも屈指のセレブである。娘といっても名門の家の子供だけあって、神速の剣の使い手としても有名だ。

「あ、もしも九ちゃん？ちょっと頼みたいことがあるんだけど…」

九兵衛が電話に出たらしく、交渉を始める妙。

「…銀さん、ちょっといいですか？」

「ん？何だキノ、便所か？」

「違いますよ。…サンダーズの事ですけど、ちょっと引つ掛かるんですよ。」

銀時と新八、それに神楽は顔を近づけ、キノに耳を傾ける。

「仰木さんは大会エントリーの締め切りまで、後三日しか無いと言っていました。このタイミングで選手の大半が一斉に故障するなんて不自然ですよ。」

「確かに…一人二人ならともかく、練習中に殆どのメンバーが故障するなんて…ほぼ有り得ないですよ。」

新八が同意する。

「なるほどな、つまりオメーは今、仰木のジジイたちがピンチなのは誰かが仕組んだこと……って言いてーのか？」

「仰木さんたちは言ってますませんでした。可能性はあると思います。」

キノの考えを聞いて腕を組み、うーんと唸る銀時。キノが言ったようにこのタイミングで妨害工作があったとすれば、それはサンダーズが勝つことを良しとしない人物の行動なのはほぼ間違いないだろう。

「銀さん、九ちゃんが出てくれるそうよ。」

「本当ですか、姉上！」

「ええ。明日グラウンドに直接行くって言ってたわ。」

「姉上、ありがとうございます！」

妙の交渉によって、九兵衛の獲得に成功した。まあ交渉といっても九兵衛は妙の事が好きなので、妙に頼まれれば大抵の事は引き受けてくれるのだが。

「どういたしまして。あ、そうそう。さっき新しい卵料理に挑戦してみたんだけど……」

「よーしお前ら、時間もねーから次行くぞ次。」

銀時は妙の後ろにある台所に、お得意の暗黒物質ダークマターが置いてあるのを確認すると、急いで帰る準備を始めた。

「何、野球大会だと？」

次に当たったのは、資金集めのためにキャバクラの店先で客寄せをしている桂と、その相棒である謎の宇宙生物のエリザベスだ。

「メンバーが足りなくて困ってるんです。桂さん、助けて貰えませんか？」

「ふむ…銀時とは長い付き合いだしな、よからう。ファミスタで鍛えた実力を見せてやろう！」

やる気満々な桂。ここでパワプロではなく、ファミスタに走るのがファミコン好きの桂らしい所だ。そして自動的にエリザベスも加わり、大会出場メンバーが揃った。

第九訓 私を水道橋に連れて行って（後書き）

今回はサンダーズ＋万事屋一行が大会に向けて始動する話の予定で
す。

ご意見やご感想等、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1833i/>

キノ魂 The Gintama World

2010年10月9日02時38分発行